

● 四 国

岸 啓 子

春と秋のコロナ小長期には音楽活動の回復が見られたが、積極的な香川（アート県として宣伝中）と慎重な愛媛（ビデオ「まじめえひめ」を県が制作）ではかなりの開きがあった。高知では東京等からの出張公演が多く、徳島では文化芸術ホール休館（旧館閉鎖・新館建築中）に鳴門市市民ホールの改修休館が重なって1500人規模のホールが消え、音楽活動に支障をきたす事態となった。

四国唯一のプロオーケストラ瀬戸フィルは、第34回定期（志村健一指揮）では委嘱作品「瀬戸内ファンタジー」（宮崎朋葉作曲）初演とアニソンを演奏し、第35回（指揮：松岡究）では歌手層の厚い香川の強みを生かしたオペラ・ガラコンサートで会場を沸かせた。（s.藤谷佳奈枝・渡辺理香, ms.山下裕賀, t.寺島弘城・宮里直樹・若井健司, bar.薦田義明 四国二期会オペラ合唱団）。例年多様な規模と編成で実施してきたシカコンサートや森のコンサート、商店街やモール等における地元密着型演奏活動は中止や縮小を余儀なくされた。

高松交響楽団創立70周年第125回定期（指揮：松下京介 pf:青柳晋 プラームス：ピアノ協奏曲第2番、ストラヴィンスキー：「火の鳥」）、高知交響楽団創立90周年定期（第167回 指揮：平川範幸 ムソルグスキー/ラヴェル：「展覧会の絵」）はそれぞれ管弦楽器を存分に鳴らせるロマン派作品を熱演した。徳島交響楽団はニューイヤーコンサート（指揮：松下京介 ギター：徳永真一郎）と第50回定期を開催、愛媛交響楽団は2年・連続4回の定演中止となった。

ベートーヴェン第9交響曲アジア初演の地である鳴門市恒例の第9演奏会は中止されたが、同じくドイツ俘虜音楽団ゆかりの丸亀市では加藤完二指揮 丸亀シティフィルにより例年通り実施され、本願寺塩屋別院でのプレコンサート（指揮：近澤裕明）も好評だった。人口約3万3千人の四万十市で30年近く続く四万十川国際音楽祭では中村交響楽団第88回定期（指揮：柳川雅史、山下旭 Pf：林靖子）がベートーヴェンの作品（抜粋）を演奏した。また香川でも高松ベートーヴェン記念祭連続コンサートを昨年から大山晃（音楽監督・指揮）が企画実行している。

音楽と舞踏の融合を求める新たな潮流の中で、《動物讃歌～音楽・舞踏・朗読・美術による「動物の謝肉祭」》（大山晃指揮 高松コンテンポラリーソロイスト）や、《徳島発 身体芸術の祭典》「モノクロオーケストラ×コンテンポラリーダンスによる踊れ、第九！」は興味深い公演となった。

四国二期会香川支部第46回公演The light project オペラ・ガラ・スクリーンコンサート（高松市2月）はステージと客席の境に張った紗幕に映像を映す新スタイルを採り、過去の上演映像も加えるなどして好評裡に終了した。徳島ではクラウドファンディングによって費用を調達し、地元合唱団も出演して《カヴァレリア・ルスティカーナ》（さわかみオペラ12月）が上演された。愛媛のオペラは《ラ・ボエーム》レクチャー・コンサート（四国中央市10月）のみで、長年地元オペラをけん引してきたオペラえひめの公演は再延期となった。

高松国際古楽祭（監督・トラベルソ：柴田俊幸 9月）は大縮小して開催された。コレギウム・ムジクム高松（第25回 主宰・指揮：大山晃 2月）は健在、発展目覚ましい高知バハカンターフェライン（第24回 主宰・指揮・バス：小原浄二）は、バハのカンタータとミサ曲を演奏し存在感を示した。

四国発の音楽会ストーリーミング配信やライブビューイングは殆どなかったが、演奏映像をネットにあげる例は多く、愛媛作曲協議会も作曲作品展後に演奏をYouTubeにアップしている。ホールで聴く生の音楽体験は重要であるが、音楽会自体が少ない地方ではそれ以外のメディアも不可欠である。以前からあったベルリンフィル・デジタルコンサート等に加え、コロナ禍で音楽会のネット配信が大幅に増え、国内外の音楽シーンに接する機会が広がったのは意味深い変化であった。